

会報

モンゴル

VOL. 52 2008.8.11

●発行所 中山 喜重
●発行所 長野県モンゴル親善協会
長野市南町520
TEL-FAX 026-235-6717



「第19次モンゴル産業・文化視察団」

報告特集

ウンドルシレットに放牧された馬の群れ

写真：塚田 守正

信州蕎麦と

モンゴル人

小諸城址「懐古園」脇にある信州蕎麦本舗「草笛」の玄関横に、次のような看板がある。

「小諸蕎麦切りの歴史」

平安の昔から浅間根腰の蕎麦は良質高価なものとして京の都に運ばれていた。この名声を高めた蕎麦作りは深くかかわったのは朝廷の牧場技術者(モンゴルから帰化した人々)や伴野諸人(朝廷の使い人)と呼ばれる人達でした。

天正18年、小諸・南北佐久一円の領主となった仙石秀久公は、直ちに良質の蕎麦を活かした殖産事業を興し(領内の蕎麦産出量、浅間山麓五千石、相木・川上参千石)浅間の蕎麦は江戸へ、川上の蕎麦は京・大阪と送り外貨を得たという。又、お城に役付きを招いて蕎麦を振舞い領民との絆を強める等、領主は代々これを継承したということが、古文書等により識ることが出来ます。

草笛は昭和36年、仙石公を小諸蕎麦切りの始祖として伝承を創りました。この時「くるみそば」「くるみおはぎ」等を創作発表いたしました。

小諸蕎麦切り普及会会長

蕎麦史研究家 草笛主人

これは、平成5年松本の「やまびこドーム」で開催された「信州博」に展示されたもので「草笛」の主人、中村利勝氏が小諸蕎麦の歴史を考察し、表わされたものである。

嘗て、奈良朝末期、御牧ヶ原の牧場に朝廷へ献納する馬(貢馬)の飼育技術を指導するために、運々やって来たモンゴル人が、望郷の想いで口ずさんだ唄が「小室節」となり、やがて、馬子唄や追分節となって、全国に伝播したという学説がある。

また、日本には野生の馬はいなく、所謂、在来種といわれる木曾馬のような馬は弥生時代から古墳時代にかけて、東北アジアから朝鮮半島を南下して、日本に来た騎馬民族と一緒にやって来たモンゴル馬が原種である、という説が一般的である。

考古学者、故江上波夫氏が戦後間もない昭和23年、御茶ノ水の喫茶店での座談会において、東北アジアの遊牧騎馬民族が日本国家を起(た)てたとして、大センセーションを巻き起こしたことがあり、モンゴル人と日本人との関係は古く、深甚なものがあると思う。

そもそも、信州人とモンゴル人の関係はこれらのもとも起因していて、モンゴル人が望郷の念に駆られ小室節に似た故郷の民謡を唄いながら、浅間山麓で蕎麦を栽培し、飼育した馬とともに朝廷に献納したとすれば、それもまたむべなるかなである。

事務局 西澤 寛記